

NGOと行政・学生が協働した若者へのAIDS予防啓発の試み

福島由美、井上尚子、池田朋子、北村紀代子

人権と共生を考えるエイズ・ワーカーズ・福岡

【目的】行政とNGO(AWF)が、若者のHIVに対する知識と関心を高めるため、S大学生らと共に啓発方法やグッズに関する検討及び作成など、新たな予防啓発活動を行う。

【方法と結果】大学祭で予防啓発活動に取り組んでいるサークルの学生を中心に呼びかけ、ワークショップなど6回の学習会を実施。延べ46人が参加。毎回終了後のアンケートで知識と意識の確認を行った。全学習会終了後15名でグループを結成し、グループ名のロゴを作成。若者の性感染症予防のために、1)若者に伝えたいことを“ことば”にする2)それを盛り込んだ啓発グッズ(コンドームケース、パンフレット)を作成し、大学祭で配布3)啓発グッズに対する学生のアンケート調査4)啓発ポスターを作成し、大学周辺の若者が集まる施設に配布、以上を行った。大学祭で、学生が作った“ことば”「忘れてない？」を入れたコンドームケースなどを500個配布した。ポスターは大学周辺の施設50箇所にAWFが、市内の学校、公共機関には行政が配布した。コンドームケースを受け取った学生70人にアンケート調査を実施し、回答のあった50人中、実際にコンドームケースを使っている者は15人(33.0%)だった。パンフレットは、全員が「わかりやすい・役立つ」と回答した。

【考察と結論】参加型の学習会を行うことは、更なる知識の拡充および、学生自身のモチベーションの向上に効果的だった。学生自身で活動方法を考え実施したことは、周りの若者に「身近か感」を意識づけることができた。NGOが関わる利点として、1)学生の希望に柔軟に対応できた2)講師を多方面から招くことで学生の興味を引き出せた3)学生に近い年代のスタッフが進行することで自由な意見やアイデアが生まれたが挙げられる。今回は若者がコンドームケースを携帯する行動変容までは至らなかったが、配布活動によって、予防行動について考える一つのきっかけを与えることができたと思われる。